

日本に伝わった漢訳イソップ物語

内 田 慶 市

1. 『意拾喩言』から『伊娑菩喩言』へ

ロバート・トームによって「中国の衣裳を身にまとって」⁽¹⁾登場した漢訳イソップ物語、すなわち『意拾喩言』(1840)⁽²⁾は、その後、『伊娑菩喩言』⁽³⁾とその名称を変えて香港と上海で再びその姿を現すことになる。その改称が誰の手に依ったか⁽⁴⁾は未だ明らかではないが、筆者はこれまでに次の3種の『伊娑菩喩言』を見ている。

(1) 刊行年不詳 上海施醫院蔵板 (北京大学図書館蔵⁽⁵⁾)

全38葉、毎半葉8行、毎行20字

(2) 同治七年(1868) 香港英華書院印刷 (東京都立中央図書館諸橋轍次文庫蔵)

全29葉、毎半葉10行、毎行22字

(3) 光緒癸卯年(1903) 仲夏四次校讎 香港文裕堂版⁽⁶⁾ (オーストラリア国立大学図書館蔵)

全29葉、毎半葉10行、毎行22字

いま、これらの版本と『意拾喩言』、および参考として『遐邇貫珍』に連載された部分との語彙校勘表を〈付表1〉として示しておいた(明かな誤字と思われるものには*をつけておいた)が、まず(1)の上海版は『意拾喩言』との異同が最も少なく(合計31箇所)、それらの異同がそのまま他の版本にも見られるというところから、この上海版が『意拾喩言』の最初の改訂版ということが言えるだろう。その改訂の主旨は主に次のような点である。

57-29a-2	野狼	野狼	野狼	* 重狼
57-29a-8	面行面説	面行面説	面行面説	* 面行而説
58-29b-7	則	則	遂	遂
58-30a-7	有齒焚其身	有齒焚其身	有齒以焚其身	有齒以焚其身
58-30a-8	豈不然乎	豈不然乎	豈不然乎	豈不然哉
59-30b-5	同類	同類	同類	* 同類
61-31b-4	則	則	已	已
61-31b-8	走出	走出	走出	* 走去
61-32a-1	有是理乎	有是理乎	有是理乎	有是理也
63-32b-8	甘美	甘美	甘美	* 甚美
63-33a-1	其樹易地而栽	其樹易地而栽	易地而栽其樹	易地而栽其樹
63-33a-2	每年	每年	每年	* 每井
63-33a-4	正此謂也	正此謂耳	正謂此耳	正謂此耳
64-33a-7	其杉	其杉	杉樹	杉樹
64-33b-2	剛強	剛強	剛強	* 剛弱
64-33b-4	正此謂也	即此謂耳	即此之謂耳	即此之謂耳
65-34a-4	則聲	則聲	出聲	出聲
65-34a-4	少得	少得	少者	少者
65-34a-4	說話多	說話多	說話多	說話多者
65-34a-4	恐虛	恐虛	必失	失
66-34a-8	被	被	* 彼	被
66-34b-1	意拾	伊婁音	伊婁音	伊婁音
66-34b-4	意拾	伊婁音	伊婁音	伊婁音
66-34b-5	無一生命矣	無一生命矣	無一生命矣	* 無一生命矣
66-34b-5	均	均	均	* 皆
68-35b-1	象	象	象	* 眾
68-35b-1	慧智	慧智	智慧	智慧
69-36a-4	* 妨	防	防	防
69-36a-7	當誤	當誤	反誤	反誤
70-36b-4	繫	繫	繫	* 擊
71-37b-3	可觀星者為誠	可觀星者為誠	可以星者為誠	可以星者為誠
73-38b-2	自思	自思	自思	* 自恩
73-38b-3	先生其嘴	先生其嘴	先生之嘴	先生之嘴
73-38b-5	則	則	即	即
73-38b-5	即	即	乃	乃
73-38b-6	喉中	喉中	喉中	口中

聚

(a) 特殊な「旧白話語彙」や「文言語彙」などを平易な語彙に改める。

(其→豈, 仔→子, 信→言, 則聲→出聲, 殊料→詎料, 能可→寧可, 犬→狗)

(b) 文体の統一あるいは文意の明確化。(我→吾, 性格→稟性, 不行→不從)

(c) 単純な語彙の置き換え。(莫→勿, 也→焉, 也→耳, 少→鮮, 其→此)

(d) 誤字の修正。(檢→檢, 妨→防)

また、誤記と思われる書き換えも見られる(先已→已先, 身手→身首)が、これらはそのまま他の版本に引き継がれている。“食用→日用”も誤記と考えられるが、『意拾喻言』の対応する英文は“the style of living”であり、その意味では誤りとも言えないかも知れない。ただし“食用→日用”は他の版本には見られず、『遐邇貫珍』にだけ見られる。

上海版と(2)の英華書院版とでは87個所に上る違いが見られ、(3)の文裕堂版とでは更に多くの異同がある(139個所)。このうち、英華書院版には2個所の、文裕堂版には42個所の明かな誤字が見られ、英華書院版と文裕堂版との異同は、明かな誤字を除けばわずか10個所にとどまっている。従って、上海版と英華書院版との異同は85個所、上海版と文裕堂版との異同は95個所ということになる。いずれにせよ、香港版(英華書院版と文裕堂版)は上海版からの大幅な改訂版とすることができる。その改訂は、語彙の置き換えのみならず、下に示すような文の構造や表現の改変にまで及んでおり、総じて「文意のより明確さ」を求めたものと言することができるだろう。

亦汝之罪也→汝亦有罪焉(1)

人或見之→若人見之(2)

於是張口舞爪左支右盤不能取勝→於是張口舞爪而對敵担小無所用武(10)

殊蚊忽然鑽入其耳→蚊乃忽然鑽入其耳(10)

又何怪乎→擇術不可慎歟(28)

切不可如我處境→處境切不可如我(33)

犬不服氣→犬心不服(40)

口觸銼齒血滴→口觸銼齒血滴銼上(46)

殊犬辭之一殊犬不顧其食(54)

其樹易地而栽→易地而栽其樹(63)

英華書院版と文裕堂版との体裁上の違いは、英華書院版では「伊娑菩喻言叙」と「小引」の後に、葉を改めずに第1話の「豺害羊」を始めるのに対し、文裕堂版では「伊娑菩喻言叙」と「小引」で一葉を使い、第1話から新たに葉を開始するという点である。

内容的には、この二つの版本では、以下のように、その「叙」が大きく異なっている(上海版と英華書院版は同じ)。

<英華書院版の叙>

余作是書，非以筆墨取長，蓋吾大英及諸外國，欲習漢文者，苦於不得其門而入，即如先儒馬禮遜所作英華字典，固屬最要之書，然亦僅通字義而已，至於詞章句讀，並無可考之書，故凡文字到手，多屬疑難，安可望執筆成文哉，余故特為此者，俾學者預先知其情節然後持此細心玩索，漸次可通，猶勝傅師當前過耳之學，終不能心領而神會焉，學者以此常置案頭，不時玩習，未有了然而自得者，誠為漢道之梯航也 勿以淺陋見棄為望 知名不具

<文裕堂版の叙>

余蓋是書，非以筆墨取長，蓋以中西文字懸殊，凡諸西人，欲習華文者，每苦於不得其門如入，即馬禮遜所撰華英字典，固屬最要之書，然亦僅通字義而已，並未旁及詞章，故凡文字到手，多屬疑難，安可望執筆成文哉，余特譯此書，俾學者預先知其情節，然後特此細心玩索，當勝如面命耳提之學，學者當以此常置案頭，潛心領會，未有不了然者，誠為漢道之梯航也 幸勿以淺陋見棄為望。

博文居士謹跋

このように、文裕堂版では、やや簡潔になり、また「博文居士」という署名が使用されている。なお、「小引」および本文は全く同じ組版である。

このほか、上海版には最後の2つの寓話（報恩鼠、豺求白鶴）に「挿絵」⁽⁷⁾が描かれてあるのも大きな特徴である。

<付表2> タイトル対照表

	意拾喻言	上海版	英華書院版	文裕堂版
1	豺噬羊	1 豺噬羊	豺噬羊	豺噬羊
2	雞公珍珠	2 雞公珍珠	雞公珍珠	雞公珍珠
3	獅熊爭食	3 獅熊爭食	獅熊爭食	獅熊爭食
4	鵝生金蛋	4 鵝生金蛋	鵝生金蛋	鵝生金蛋
5	犬影	5 犬影	犬影	犬影
6	獅鬚同獵	6 獅鬚同獵	獅鬚同獵	獅鬚同獵
8	二鼠	7 二鼠	二鼠	二鼠
9	農夫救蛇	8 農夫救蛇	農夫救蛇	農夫救蛇
10	獅鬚爭氣	9 獅鬚爭氣	獅鬚爭氣	獅鬚爭氣
11	獅蚊比藝	10 獅蚊比藝	獅蚊比藝	獅蚊比藝
12	狼受大騙	11 狼受大騙	狼受大騙	狼受大騙
13	鴉穿鴉皮	12 鴉穿鴉皮	鴉穿鴉皮	鴉穿鴉皮
14	鴉插假毛	13 鴉插假毛	鴉插假毛	鴉插假毛
15	麋龜	14 麋龜	麋龜	麋龜
16	龜兔	15 龜兔	龜兔	龜兔
17	雞門	16 門雞	門雞	門雞
18	黑白狗褥	17 黑白狗褥	黑白狗褥	黑白狗褥
19	狐指罵蒲提	18 狐指罵蒲提	狐指罵蒲提	狐指罵蒲提
20	孩子打蛤	19 孩子打蛤	孩子打蛤	孩子打蛤
21	蛤擲水牛	20 蛤擲水牛	蛤擲水牛	蛤擲水牛
22	鷹貓豬同居	21 鷹貓豬同居	鷹貓豬同居	鷹貓豬同居
23	馬恩報鹿仇	22 馬恩報鹿仇	馬恩報鹿仇	馬恩報鹿仇
24	蜂針人熊	23 蜂針人熊	蜂針人熊	蜂針人熊
25	獵戶逐兔	24 獵戶逐兔	獵戶逐兔	獵戶逐兔
26	四肢反叛	25 四肢反叛	四肢反叛	四肢反叛
27	鴉狐	26 鴉狐	鴉狐	鴉狐
28	裁縫戲法	27 裁縫戲法	裁縫戲法	裁縫戲法
29	洗染布各業	28 洗染布各業	洗染布各業	洗染布各業
30	瓦鐵缸同行	29 瓦鐵缸同行	瓦鐵缸同行	瓦鐵缸同行
31	狐與山羊	30 狐與山羊	狐與山羊	狐與山羊
32	牛狗同群	31 牛狗同群	牛狗同群	牛狗同群
33	眇鹿失計	32 眇鹿失計	眇鹿失計	眇鹿失計
36	齊人妻妾	33 齊人妻妾	齊人妻妾	齊人妻妾
63	狼計不行	34 狼計不行	狼計不行	狼計不行
81	老蟹訓子	35 老蟹訓子	老蟹訓子	老蟹訓子
37	雁鶴同網	36 雁鶴同網	雁鶴同網	雁鶴同網
38	鴉效鷹能	37 鴉效鷹能	鴉效鷹能	鴉效鷹能
39	東木譬喻	38 東木譬喻	東木譬喻	東木譬喻
40	大山懷孕	39 大山懷孕	大山怪異	大山怪異
41	獵主責犬	40 獵主責犬	獵主責犬	獵主責犬
42	戰馬欺驢	41 戰馬欺驢	戰馬欺驢	戰馬欺驢
43	鹿照水	42 鹿照水	鹿照水	鹿照水
44	龜抱蛇蛋	43 龜抱蛇蛋	龜抱蛇蛋	龜抱蛇蛋
45	鼓手辯理	44 鼓手辯理	鼓手辯理	鼓手辯理

46	驢犬妒寵	45	驢犬妒寵	驢犬妒寵	驢犬妒寵
49	毒蛇咬鏗	46	毒蛇咬鏗	毒蛇咬鏗	毒蛇咬鏗
50	羊與狼盟	47	羊與狼盟	羊與狼盟	羊與狼盟
51	斧頭求柄	48	斧頭求柄	斧頭求柄	斧頭求柄
52	鹿求牛救	49	鹿求牛救	鹿求牛救	鹿求牛救
53	鹿入窟穴	50	鹿入窟穴	鹿入窟穴	鹿入窟穴
54	日風相賭	51	日風相賭	日風相賭	日風相賭
55	農夫遺訓	52	農夫遺訓	農夫遺訓	農夫遺訓
56	狐鶴相交	53	狐鶴相交	狐鶴相交	狐鶴相交
58	義犬吠盜	54	義犬吠盜	義犬吠盜	義犬吠盜
59	烏誤靠魚	55	烏誤靠魚	烏誤靠魚	烏誤靠魚
60	驢馬同途	56	驢馬同途	驢馬同途	驢馬同途
62	馴犬野狼	57	馴犬野狼	馴犬野狼	馴犬野狼
64	狼斷羊案	58	狼斷羊案	狼斷羊案	狼斷羊案
66	雞鵠同飼	59	雞鵠同飼	雞鵠同飼	雞鵠同飼
67	縶子自啻	60	縶子自啻	縶子自啻	縶子自啻
68	指頭露奸	61	指頭露奸	指頭露奸	指頭露奸
69	鴉欺羊營	62	鴉欺羊營	鴉欺羊營	鴉欺羊營
70	業主貪心	63	業主貪心	業主貪心	業主貪心
71	杉葦剛柔	64	杉葦剛柔	杉葦剛柔	杉葦剛柔
72	荒唐受駁	65	荒唐受駁	荒唐受駁	荒唐受駁
73	意捨勸世	66	伊婆善勸世	伊婆善勸世	伊婆善勸世
74	野豬自護	67	野豬自護	野豬自護	野豬自護
75	猴君狐臣	68	猴君狐臣	猴君狐臣	猴君狐臣
76	牧童說謊	69	牧童說謊	牧童說謊	牧童說謊
78	鼠妨貓害	70	鼠妨貓害	鼠妨貓害	鼠妨貓害
79	星者自誤	71	星者自誤	星者自誤	星者自誤
47	報恩鼠	72	報恩鼠	報恩鼠	報恩鼠
7	豺求白鶴	73	豺求白鶴	豺求白鶴	豺求白鶴
34	愚夫求財				
35	老人悔死				
48	蛤求北帝				
57	車夫求佛				
61	鹽不自量				
65	愚夫癡愛				
77	人翻論理				
80	鯢鱈皆亡				
82	真神見像				

香港版、上海版とも収めている寓話の数は73であり、その配列順序も同じである。ただし、上海版と他の版本ではタイトルに若干の違いが見られる(1、39、43)。ここで、香港版と上海版に収められた寓話と『意拾喻言』のそれとの対照表をく付表2>として示しておく。この表からも明かなように、『意拾喻言』から省かれた寓話は以下の9話である(数字は『意拾喻言』の寓話の通し番号)。

- 34 愚夫求財
- 35 老人悔死
- 48 蛤求北帝
- 57 車夫求佛
- 61 驢不自量
- 65 愚夫癡愛
- 77 人獅論理
- 80 鯀鱸皆亡
- 82 真神見像

これらの寓話には、77の「人獅論理」と80の「鯀鱸皆亡」とを除いては、実は興味深い共通点が見られる。つまり、「神」や「佛」に代表される宗教的、あるいは神話的なものの存在である。

34と61では“god”、“Image of his god”や“heart spiritual gods”として“神”“神像”“靈神”が、35では“Pluto”としての“閻君”や“閻王”が、また48では“Jupiter”として“北帝”、“帝”、“上帝”が現れる。同じように、57では“Hercules”が“阿彌陀佛”や“佛”として、65では“Diana”が“嫦娥”で、82では“Mercury”が“真神”などと訳されて登場してくる話である。

これらは訳者ロバート・トームによるイソップ翻訳の真骨頂とさえ言うべきものと筆者は考えているが、『意拾喻言』の改訂者はこれを避けたのである。つまり、宗教色、迷信、中国人にとっては馴染み薄いもの(たとえば80の魚類)

の排除である。このことは、布教のためには、「神」をも排除するという、当時の宣教師たちのあくなき「中国への同化」の現れと見ることもできるであろうし、当時の“God”をめぐる用語論争（「神」か「上帝」か）を避けるためと見ることもできるかも知れない。あるいはまた、単に「中国語学習のテキスト」や「教訓物」の配布という慈善事業の一環に過ぎないためという見方もできるだろう。

2. 『伊娑菩喩言』の日本への伝来

さて、この『伊娑菩喩言』は実は日本にも伝わっている。

漢訳イソップの日本への伝来については、拙稿1999でも触れたように、新村博士が早くに指摘されている。

ともかくも此の漢訳本『意拾喩言』の系統本は、幕末嘉永安政年間に至つて、日本に伝来した。駿河田中藩の増田貢その号を岳陽といった人の写した『伊娑菩喩言』と題する写本を岡崎桂一郎博士の蔵本によつて大正初年に見たことがあるが、それには長州の宍戸璣（山県半蔵、号世衡）が安政三年丙辰陽月に跋を加へたものと、又安政四年十一月二十日吉田松陰が再跋を施したものを書加へてある。私はそれらの跋文のない普通の写本を蔵してをる。（新村1973, 416p）

岡崎桂一郎博士の蔵本は、所在がつかめぬままだが、それに書き加えられてあったという宍戸璣（1829-1901、後の清国特命全権公使）と吉田松陰の跋文は、その写しが新村出記念財団重山文庫に収められている。また、同じく重山文庫蔵の跋文のない写本は挿絵が省かれた以外は、上海版と葉数、行数、字数とも全く同じであり、文字の異同も見られない。

宍戸の跋文とは以下のものである。（文中、俗字が使われている部分もあるが、ここでは全て旧字体とした。また点は仮に筆者による。）

喩言七十三條、蓋英人所譯而係上海施醫院活字刷板、其舉地名說時世皆假

之於支那，是譯者之苦心也，此書未經清舳之售販，而某氏嘗獲之於俄艦中云，亦罕靚珍籍矣，余借覽數日，乃膳而篋之，宗本間圖人物飛走，今以其不便於膳寫，盡削之

丙辰陽月 敬宇生璣識

新村博士は、この跋文に対して

宍戸が上海版の『伊娑菩喩言』を長崎の露艦に得たことも察し得られる。

(同上, 417p)

と述べておられるが、跋文からは、「某氏が露艦から得たものを、宍戸がそれを数日借りて書き写し綴じた」としか読めないところであり、宍戸本人が長崎でロシア艦から得たとする根拠は示されていない。

また、吉田松陰の再跋には、松陰がかつて『遐邇貫珍』の中で「馬鹿同遊」を読んだこと、その後、長崎で宍戸から73則の写本を見せられたこと、それをまた岡部生に写させたことなどが述べられている。

いずれにしても、安政四年（1857）までに、上海版『伊娑菩喩言』はロシア艦から某氏がそれを入手し、宍戸とさらには岡部生によって転写されたということがわかる。増田貢の写本はその後のものであろう。

ところで、新村博士の以下の指摘は示唆に富んでいる。

宍戸が長崎に初遊したのは、嘉永六年のことで、同年松陰先生も平戸長崎に西遊したのであつた。されば『意拾喩言』を断片でも完本でも日本人が見たのは、嘉永六年即ち1853年ころ、喩本の翻訳及び初刊の1840年より十三年の後にあたるわけである。⁽⁶⁾ (同上, 417p)

この「嘉永六年（1853）」と「長崎」、「ロシア艦」から私たちはあることに思い至る。ゴンチャロフの『日本渡航記』である。

長崎談判におけるロシア政府の代表、水師提督ブチャーチンが4隻の艦船を率いて日本にやってきたのは、嘉永六年7月16日（=1853.8.10）の時である。そのブチャーチンの乗った船がフレガート艦「パルラダ」号であり、それに同乗していた一人がゴンチャロフ（Gontcharov, Ivan Alexandrovitch, 1812-

1891)であった。

彼らは、長崎到着後、一時上海に赴いている。その期間は11.26-12.17 (1853)の約1ヶ月であるが、その後、その年の暮れ(12.22)に長崎に戻る。その紀行文の上海の部分に興味深いことが書かれている。

上海で私は支那語の本を三冊貰った。新約聖書と地理とイソップ物語だ。これは新教宣教師の好意であった。彼等は支那語に譯し、ロンドンで印刷し、それも云ふも怖ろしいほど何百萬部印刷し、支那に持つて来て、無代で頒布してゐる。この出版費として、人と共同で巨額の寄附をしたといふイギリスの一富豪の名も聞いた。最も活躍してゐる宣教師の一人であるメドホースト氏は支那に三十年も生活し、休む暇もなくキリスト教の傳道に活躍し、ヨーロッパの本を支那語に譯し、各地を巡回してゐる。この人は現在上海に住んでゐる。艦の支那語學者達はこの人を訪問して、その出版にかかる、ヨーロッパでは相當に稀い本を澤山手に入れて來た。そのうちの一部は同氏から寄贈を受けたものである。(ゴンチャロフ著、井上滿譯『日本渡航記』岩波書店、1941、248-249p)

ここで登場するイソップ物語は恐らく「上海施醫院藏板伊娑菩喻言」を指している。聖書はメドハースト(Walter Henry Medhurst)による大英聖書公会(The British and Foreign Bible Society)発行の『新約全書』であり、地理はミュアヘッド(William Muirhead)の『地理全志』(1853-1854)であろう。

1853年ころ、聖書公会は中国での布教の転機を迎えるにあたって、『新約全書』を100万冊印刷することを決定している。ミュアヘッドの『地理全志』の出版にあたっては、イギリス商人デント(Lancelot Dent)がロックハート(William Lockhart)に預けた寄付金1000圓で賄われたという事実もゴンチャロフの記述に一致している⁽⁹⁾。

ただ、これらは、ゴンチャロフが言うように「ロンドンで印刷」されたのではなく、墨海書館の印刷にかかるものであった。墨海書館はその英語名を

London Missionary Society Press といひ、ロンドン伝道協会 (London Missionary Society) の出版機関であるが、ゴンチャロフはこれがロンドンで印刷されたものと誤解したのであろう。墨海書館は1843年に創設され、1844年4月から印刷を開始する。また、墨海書館の印刷物の一部は「上海施醫院蔵板」として発行されていたようである。「上海施醫院」とは拙稿1996、1999で明らかにしたように、俗称であつて、正式名称は「仁濟醫館」といふ。「上海施醫院蔵板」とある出版物には、この『伊娑菩喩言』のほか、筆者がこれまでに確認できたものには、合信 (Benjamin Hobson) の『西醫略論』(1857)、『婦嬰新説』(1858)、『内科新説』(1858)がある。

ともかくも、このメドハーストから贈られた上海版『伊娑菩喩言』をゴンチャロフあるいは「艦の支那語學者達」が長崎で日本人(宍戸の周辺の「某氏」)に与えたのではないかというのが私の推測である。

ただし、この点に関して、増田渉1983では次のように述べている。

『イソップ物語』の漢訳本『伊娑菩喩言』を、長崎にきたロシアの軍艦から得た、といふのは少し奇妙な話のようだが、それは恐らくそのロシア軍艦に乗組んでいた中国人から得たということだと思ふ。ペリー来航のときアメリカ軍艦に乗組んでいた中国人、羅森(羅向喬)から『南京紀事』、つまり『満清紀事』を得たことは前にふれたが、当時日本に航海してきて、日本の当局者と何らかの交渉をもとうとする外国船艦には、必ず中国人が乗組んでいたようだ。(53p)

当時日本に通交を促してきた外国船艦の公文書は、一般に自国語のものほかに、漢文のものを併せて提出したのであつて、このような場合、漢文文書はまるで不可欠のものにさえなっていたようだ。そのために中国の士人を帯同したものと考えられる。(54p)

『南京紀事』(『満清紀事』)をわが国に伝えたのはペリー艦隊の乗組員のなかにいた中国人であつたように、『伊娑菩喩言』もまたロシア軍艦に乗組み漢文文書を担当していた中国人から伝えられたものに相違ないと

考えたい。(54p)

もちろん、増田氏の言われるようなことは確かにあったのだろうが、ここではゴンチャロフの記載との時間的、場所的な奇妙な一致に着目したい。

「繪畫とか、寒暖計とか、磁石とか、婦人用品とか、好奇心を起させ、需要を起すほどのものは全て分けてやった」(ゴンチャロフ同上書, 270p)

とゴンチャロフは述べているが、「この好奇心を起させ、需要を起すほどのもの」の中に、イソップが含まれていても不思議ではないと考えたいのである。

なお、その後、高杉晋作等の文久2年(1862)の上海行の際の購入図書の中にも『伊娑菩諭言』が含まれていたことは夙に明かである⁽¹⁰⁾。

3. 『伊娑菩諭言』の翻刻本

現在、刊本としてよく見られる日本における『伊娑菩諭言』の翻刻本には次の2種類がある⁽¹¹⁾。

(A) 香港英華書院原刻、東京阿部弘國訓點『漢譯伊蘇普譚』 明治九
(1876)年九月新雕

明治九年丙子九月(大槻)磐溪の「伊蘇普譚序」

明治九年八月東京阿部弘國識の「伊蘇普小傳」

明治九年八月十四日版權免許 同年十月廿日出版發兌

出版人 青山清吉

本文30葉

(B) 大清國大儒某反譯・日本小野筑山訓點、前田林外編纂

『AESOP'S FABLES 漢譯批評・伊蘇普物語 全 一名伊娑菩諭言』

刊行年月日不詳、ただし、同治七(1868)年春三月の「叙」あり。

東京湊屋藏梓

本文全22葉

いま、(A)を阿部本、(B)を小野本と呼ぶことにするが、ともに寓話の数は73話

<付表3> 『伊姿苦諭言』の翻刻本のタイトル対照表

上海版	英華書院版	阿部本	小野本	小野本
1 豺烹羊	豺啣羊	豺啣羊	東木譬喻	38
2 雞公珍珠	雞公珍珠	雞公珍珠	鸚蚊比藝	10
3 鸚熊爭食	鸚熊爭食	鸚熊爭食	狼受犬騙	11
4 鵝生金蛋	鵝生金蛋	鵝生金蛋	鷓穿剝皮	12
5 犬影	犬影	犬影	鴉插假毛	13
6 鸚鵡同獵	鸚鵡同獵	鸚鵡同獵	鷹龜	14
7 二鼠	二鼠	二鼠	龜兔	15
8 農夫救蛇	農夫救蛇	農夫救蛇	鬥雞	16
9 鸚鵡爭氣	鸚鵡爭氣	鸚鵡爭氣	黑白狗搏	17
10 鸚蚊比藝	鸚蚊比藝	鸚蚊比藝	狐指罵竊提	18
11 狼受犬騙	狼受犬騙	狼受犬騙	孩子打蛤	19
12 鷓穿剝皮	鷓穿剝皮	鷓穿剝皮	蛤擲水牛	20
13 鴉插假毛	鴉插假毛	鴉插假毛	鷹貓豬同居	21
14 鷹龜	鷹龜	鷹龜	馬恩報鹿仇	22
15 龜兔	龜兔	龜兔	蜂針人熊	23
16 鬥雞	鬥雞	鬥雞	獵戶逐兔	24
17 黑白狗搏	黑白狗搏	黑白狗搏	四肢反叛	25
18 狐指罵竊提	狐指罵竊提	狐指罵竊提	鴉狐	26
19 孩子打蛤	孩子打蛤	孩子打蛤	裁縫戲法	27
20 蛤擲水牛	蛤擲水牛	蛤擲水牛	洗染布各業	28
21 鷹貓豬同居	鷹貓豬同居	鷹貓豬同居	雞公珍珠	2
22 馬恩報鹿仇	馬恩報鹿仇	馬恩報鹿仇	鸚熊爭食	3
23 蜂針人熊	蜂針人熊	蜂針人熊	鵝生金蛋	4
24 獵戶逐兔	獵戶逐兔	獵戶逐兔	犬影	5
25 四肢反叛	四肢反叛	四肢反叛	鸚鵡同獵	6
26 鴉狐	鴉狐	鴉狐	二鼠	7
27 裁縫戲法	裁縫戲法	裁縫戲法	農夫救蛇	8
28 洗染布各業	洗染布各業	洗染布各業	鸚鵡爭氣	9
29 瓦鐵缸同行	瓦鐵缸同行	瓦鐵缸同行	瓦鐵缸同行	29
30 狐與山羊	狐與山羊	狐與山羊	狐與山羊	30
31 牛狗同群	牛狗同群	牛狗同群	牛狗同群	31
32 眇鹿失計	眇鹿失計	眇鹿失計	眇鹿失計	32
33 齊人妻妾	齊人妻妾	齊人妻妾	齊人妻妾	33
34 狼計不行	狼計不行	狼計不行	狼計不行	34
35 老蟹訓子	老蟹訓子	老蟹訓子	老蟹訓子	35
36 雁鶴同網	雁鶴同網	雁鶴同網	雁鶴同網	36
37 鴉效鷹能	鴉效鷹能	鴉效鷹能	鴉效鷹能	37
38 東木譬喻	東木譬喻	東木譬喻	豺啣羊	1
39 大山怪異	大山怪異	大山怪異	大山怪異	39
40 獵主責犬	獵主責犬	獵主責犬	獵主責犬	40
41 戰馬欺驢	戰馬欺驢	戰馬欺驢	戰馬欺驢	41

42	鹿照水	鹿照水	鹿照水	鹿映水	42
43	雞抱蛇蛋	雞抱蛇蛋	雞抱蛇蛋	雞抱蛇蛋	43
44	鼓手辯理	鼓手辯理	鼓手辯理	鼓手辯理	44
45	驢犬妒龍	驢犬妒龍	驢犬妒龍	驢犬妒龍	45
46	毒蛇咬蝰	毒蛇咬蝰	毒蛇咬蝰	毒蛇咬蝰	46
47	羊與狼盟	羊與狼盟	羊與狼盟	羊與狼盟	47
48	斧頭求柄	斧頭求柄	斧頭求柄	斧頭求柄	48
49	鹿求牛救	鹿求牛救	鹿求牛救	鹿求牛救	49
50	鹿入罅穴	鹿入罅穴	鹿入罅穴	鹿入罅穴	50
51	日風相賭	日風相賭	日風相賭	日風相賭	51
52	農夫遺訓	農夫遺訓	農夫遺訓	農夫遺訓	52
53	狐鶴相交	狐鶴相交	狐鶴相交	狐鶴相交	53
54	竊犬吠盜	竊犬吠盜	竊犬吠盜	竊犬吠盜	54
55	烏誤靠魚	烏誤靠魚	烏誤靠魚	烏誤靠魚	55
56	驢馬同途	驢馬同途	驢馬同途	驢馬同途	56
57	馴犬野狼	馴犬野狼	馴犬野狼	馴犬野狼	57
58	狼斷羊案	狼斷羊案	狼斷羊案	狼斷羊案	58
59	雞鵲同飼	雞鵲同飼	雞鵲同飼	雞鵲同飼	59
60	縱子自害	縱子自害	縱子自害	縱子自害	60
61	指頭露奸	指頭露奸	指頭露奸	指頭露奸	61
62	鴉欺羊唇	鴉欺羊唇	鴉欺羊唇	鴉欺羊唇	62
63	業主貪心	業主貪心	業主貪心	業主貪心	63
64	杉葦剛柔	杉葦剛柔	杉葦剛柔	杉葦剛柔	64
65	荒唐受駁	荒唐受駁	荒唐受駁	荒唐受駁	65
66	伊斐普勸世	伊斐普勸世	伊斐普勸世	伊斐普勸世	66
67	野豬自護	野豬自護	野豬自護	野豬自護	67
68	猴君狐臣	猴君狐臣	猴君狐臣	猴君狐臣	68
69	牧童說謊	牧童說謊	牧童說謊	牧童說謊	69
70	鼠妨貓害	鼠妨貓害	鼠妨貓害	鼠妨貓害	70
71	星者自誤	星者自誤	星者自誤	星者自誤	71
72	報恩鼠	報恩鼠	報恩鼠	報恩鼠	72
73	豺求白鶴	豺求白鶴	豺求白鶴	豺求白鶴	73

であり、また1と39、43（阿部本の番号）のタイトルおよび語句の使い方から判断して、いずれも香港版を元にしており、上海版ではないことがわかる。とくに、阿部本は「伊娑普」をすべて「伊蘇普」に改められている点を除き、英華書院版にある2個所の誤字を訂正した上で、わずかに3個所の脱字と誤字が見られるだけであり、寓話の配列も全く同じであって、英華書院版の忠実な翻刻といえることができる。タイトルに関しては、小野本と他の版本では「鹿照水」が「鹿映水」となっている違いがあるだけである。いま、付表2に阿部本と小野本のタイトルを追加したものを<付表3>として示しておいた。

さて、阿部本と小野本との違いは以下の点である。

まず、「小傳（『意拾喻言』や『伊娑普喻言』の「小引」）」に違いが見られる。

阿部本の「小傳」は以下の通りである。

伊蘇普小傳

伊蘇普者、二千五百年前、生於小亞細亞比利社，為人天資頗高，惟背佗而貌醜，命又數奇，鬻身雅典之市為奴，既而復被轉賣小亞細亞之撒都斯以德門之二氏，久之以氏憐其聰穎，為贖身，始得脫羈絆，遂發志歷遊四方，見王侯士庶，輒曉以言，利底亞國王格利索奇奇才，迎置宮中，每事咨詢之，因止其朝，於是益設囁言以導國人，國人日近理性，尊之為聖，後奉命使持爾比，特爾比之人曲其才，卒被掣獲，自特爾比山巔推墜以死，其所說言，口舌相傳膾炙人口，後世之人，遂筆書以傳之，至今稱寓言必推伊蘇普云

これを見ると、阿部本では元にした英華書院版の「小引」も織り交ぜてはいるが、明らかに以下の渡邊温の『通俗伊蘇普物語』（明治五年）における「伊蘇普小傳」をふまえていることがわかる。

「伊蘇普小傳」

希臘亞の古賢伊蘇普は。紀元前五六百年の際に當り。小亞細亞の比利西亞といふ地に生れたる人なり。此人少時甚だ薄命にて。希臘亞の雅典の市人に身を鬻ぎて奴となり。既にして復小亞細亞沙摩斯島の撒入斯氏及び邪的

門氏へ轉賣られ。茲に數年の星霜を送りしに。或功勞を立たるにより。遂に其身を贖ふ事を得て。始て不羈の身となされたり。是に於て伊蘇普は四方周遊の志を發し。王侯に説き士庶に論すに専ら寓言諧詼を以てせり。故に當時才學の富贍なる事を普く世に知れける。時に小亞細亞の里地亞といふは天下比びなき富強の國なりしが。其王格爾索伊蘇普の高名を聞き。禮を厚うして宮中に招き其才識を試み給ひしに。實に海内無雙の賢才なりければ。特に優待して毎事に咨問ありけり。故に伊蘇普はしばらく其朝に止り居ける間に。或時王の密旨によりて得爾比に使せし事ありしが。或事よりして國人の暴怒を引起し。遂に凶人の手に捕はれて。名に聞えたる得爾比山の絶頂より百仞の谷底へ投落され。ここに非命に身を終りけると云々。伊蘇普氏の傳は即ち前に擧る處の如し。其詳なる事は諸書に就て考ふれども證據たしかならず。

今暫く大略を擧げ。此書を讀むものに伊氏の寓言譬論の來歴をいささかしらしむるために記すと云爾。

明治五年龍集壬申夏五月 渡邊温識

これに対して、小野本の「小傳」は“記厘士”を“希臘”に、“以治其國、國人日近理性”を“以治其國人。日近理性”としている点以外は原本と同じである。

次に、阿部本には原本の「叙」がないが、小野本には「叙」もそのまま収められている。ただし、原本とは「英文」を学ぶためのものとしている点が大きく異なっている。(下線部が原本を書き換えた部分、[]は原本から削除した部分、【 】は付け加えられた部分である)

余譯(作)此(是)書非以筆墨取長。蓋〔吾大英及諸外國〕欲習英文(漢文)者苦於不得其門而入。即如〔先儒〕馬禮遜所作英華字典。固屬最要之書。然亦僅通字義而已。至於詞章句讀。並無可考之反譯(書)。故凡文字到手。多屬疑難。安可望執筆成文哉。余故特為此者。俾學者預先知其情節。然後持此細心玩索。漸次可通。猶勝師傅(傳師)當前過耳之學。終不能心

傾而神會焉。學者以此常置案頭。不時玩習。未有了然而自得者。誠為英道
(漢道)之梯航也。勿以淺陋見棄為望。【同治七年春三月。】知名不具。

ここで、「同治七年春三月」とあるのは、あるいは原本の刊行年を示したもののかと思われるが、その原本とは先に述べた(3)の英華書院版(同治七年)の可能性が高い。

小野本と他の版本(阿部本のみならず、『伊娑善諭言』も含めて)との最大の違いは、原文で「俗云」とか「如」あるいは「諺云」とモラルを説く部分を、「評曰」で始めている点と、その寓話の配列順序である。付表3を見ればわかるように、最初に「束木譬諭」を置くのであるが、その意図はおそらく、その「評」にある。

「一本では折れやすいが、束ねると折れにくい」という有名な寓話であるが、その「評」では、まず崔鴻の「西秦録」の阿柴の話を引き、さらには毛利元就の教訓を持ち出してくる。そして、みな同じ話であり、「人情に古今なく、東西なし」というのである。

評曰 崔鴻西秦録云 吐谷渾阿柴臨卒呼子弟 謂曰 汝等各奉我一隻箭
俄而命母弟慕延曰 取汝一隻箭折之 又曰汝取十九隻箭折之 延曰不能折
也 柴曰汝曹知單者易折 眾則難摧 戮力一心 然後社稷可固 言終而卒
又毛利元就病將死 有以弓箭一束教訓諸子事 俱與此同日談 人情無古今
無東西 編者評

つまり、日本人にも卑近な寓話を最初に置くことによって、イソップ寓話のある種の「普遍性」を示そうとした意図が見受けられる。このことは、清末の林紆による中国語訳イソップ『伊索寓言』(商務印書館、1903)と相通ずるものである。

林紆の『伊索寓言』の特徴も、単なる翻訳ではなくて、訳者林紆の「読み」(「解釋」「評」)が付け加えられている点にある。それは、「畏慮曰」という形で現れている。この寓話での林紆の「評」は次のようなものである。

畏慮曰、茲事甚類吐谷渾阿柴、然以年代考之、伊索古於阿柴、理有不襲而

同者、此類是也、 , , (2b)

小野本のいう(後魏の)崔鴻の「西秦録」とは『十六國春秋』の一篇であるが、ただし、「漢魏叢書本」の『十六國春秋』にはこの話は収められておらず、後の『十六國春秋輯補』に以下のように見られ、それも『太平御覧』(巻第349、兵部80箭上)を引くとある。

(建弘=筆者)七年、白蘭王吐谷渾阿柴卒、白蘭王吐谷渾阿柴臨卒、呼子弟謂曰、汝等各奉吾一隻箭、將玩之地下、俄而命母弟慕延曰、取汝一隻箭折之、延折之、又曰、取十九隻箭折之、延不能折、柴曰、汝曹知單者易折、衆則難摧、戮力一心、然後社稷可固、言終而卒。

また同じく、『魏書』にも見えるが、阿柴を「阿豺」と作る。

阿豺又謂曰、汝等各奉吾一隻箭、折之地下、俄而命母弟慕利延曰、汝取一隻箭折之、慕利延折之、又曰、汝取十九隻箭折之、延不能折、阿豺曰、汝曹知否、單者易折、衆則難摧、戮力一心、然後社稷可固、言終而死(「魏書」卷一百一・列傳第八十九・吐谷渾)

小野本の編者は、どちらを元にしたのかは分からないが(「阿柴」と作っているところからして、恐らくは前者)、中務1996によれば、江戸時代にはすでに、浅井了意の『新語園』(1682)巻1第41「箭ヲ折リテ兄弟ニ喩フ」によってこの話を知り得たという。

いわゆるこの「三本の矢」の話の由来については、新村博士もかつて、次のように述べておられる。

而して吐谷渾の故地も蒙古も中國から方角は略同一であるから、説話の由来は中國の北部又は東北部に出たと見做される。・・・自分の豫想では、更に西の方の民族から得た喩言ではあるまいかと思ふが、それは今後の研究で段々明かになって来るだろう。(『天草本伊曾保物語』改造社、1928、旧版付録、36-37p)

ここでいう「蒙古」の説話というのは、『元朝秘史』における、「五本の矢」の話である。

春間一日他母親阿蘭豁阿煮着臘羊。將五箇兒子喚來根前列坐着。每人與一隻箭箒教折折。各人都折折了。再將五隻箭箒束在一處教折折呵。五人輪着都折不折。……

阿蘭豁阿就教訓着說。您五箇兒子。都是我一箇肚皮裏生的。如恰纔五隻箭箒一般。各自一隻呵。

任誰容易折折。您兄弟但同心呵。便如五隻箭箒。束在一處。他人如何容易折得折。住問。他母親阿蘭豁阿歿了。（『元朝秘史』卷一）⁽¹²⁾

新村博士は、この「矢の話」はヨーロッパ起源のように考えておられるように見えるが、案外その逆もあり得るのではと私は考えている。また、イソップの寓話に類似した話⁽¹³⁾が、中国へのイソップの伝来が確認される（1625年のトリゴの『況義』）以前にすでに中国に伝わっていた可能性は十分にあるが、それについては後考を俟つ。

このほか、小野本には誤字脱字も若干見られるが、原文を丹念に読みくだいた結果としての「より簡潔な表現」への置き換え、あるいは削除と思われる箇所が随所に見られる。たとえば、次のようなものである。（数字は小野本の寓話の通し番号）

悔無及矣→悔不及矣(5)

蚌鹵相纏→蚌鹵相爭(11)⁽¹⁴⁾

原毒物之不當救之也→毒物不當救(16)

豬母→豬嫂(34)

今之官府→世之僧侶(35)

豈不聞乎能爲鷄口，母爲午後→寧爲鷄口，毋爲午後(57)

このように、小野本は編者（前田林外）のある種の「意図」をもって作られた英華書院版『伊娑菩諭言』の改訂本という位置付けになると言えるのである。

なお、これらの翻刻本の普及の度合い、さらには、それ以降の「日本でのイソップ」翻訳史上の位置等々についても今後の課題である。

【参考文献】

- 内田慶市「イソップ東漸—ロバート・トームと『意拾諭言』」（『関西大学文学論集』第49巻 第1号, 1999.10.）
- 内田慶市「『イソップの東漸』補遺—「上海施医院」その他」（『関西大学中国文学会紀要』第17号, 1996.3.）
- 増田渉『雑書雑談』（汲古書院, 1983）
- ゴンチャロフ『日本渡航記』（井上満譯, 岩波書店, 1941）
- 新村出「伊曾保物語の漢訳」（『新村出全集』第7巻, 筑摩書房, 1973）
- 沈國威編『『六合叢談』1857-58の学際的研究』（白帝社, 1999）
- 鈴木券太郎「『意拾諭言』補遺」（『書史』第2冊, 1927.5.20）
- 前坊洋「イソップ、東アジアへ」（『近代日本研究6』, 1989）
- 卓南生『中国近代新聞史成立史 1815-1874』（ペリかん社, 1990）
- 中務哲郎『イソップ寓話の世界』（筑摩書房, 1996）

【注】

- (1) The fables before us, now for the first time in a Chinese costume, have been selected from Sir Roger L'Estrange's collection, (*Chinese Repository*, vol.VII, Oct. 1838, 335p)
- A portion of these fables has recently appeared in a Chinese dress, and has been wellreceived; (*Chinese Repository*, vol.VII, Dec. 1838, 403p)
- (2) 1840年以前に『意拾秘傳』という名で刊行されたことについては、拙稿1999を参照。
- (3) 『伊娑菩諭言』の成立について、拙稿1999では「最初『遐邇貫珍』に連載の形をとって、後に墨海書館から一冊の本として安政3年前後に出版されたものと考えられる」としたが、これは無理がありそうである。何故なら『遐邇貫珍』の創刊は1853年8月であり、その創刊号から『伊娑菩諭言』が登場している。ところが、本文でも後述するゴンチャロフの記載によれば、1853年頃にはすでに刊本の形で存在していたことが明かである。従って、まず香港で1853年以前に『伊娑菩諭言』として73の寓話を収めた簡約本が出され、その後、上海でも出版されたと考えるのが妥当のようである。

- (4) 筆者はメドハーストによるという一つの考えをもっているが、断定はできない。
- (5) 現在、在外研究で北京に滞在中の萩野脩二氏のご教示により、所在が判明した。記して感謝する。
- (6) この「文裕堂」とは『循環日報』内の書籍の編集、印刷、販売を行う機関であったと思われる。たとえば、胡禮垣撰『新政論議』（1895）や邵彬儒編『俗話傾談』（1903）は「香港文裕堂」の出版である。卓南生1990によると『循環日報』の創刊は、同治十二年癸酉十二月十八日（1874年2月4日）であるが、前身の「中華印務總局」のその他の営業活動は引き続き行われていたという。その営業内容は卓によれば以下のものである。

- ① 中華印務總局は引続き顧客のために中文・英文の書籍、広告、海外新聞、各種の契約・文書などの印刷を行っていた。（初期の『循環日報』にはほとんど毎日その関係の広告が掲載されている）。
- ② 書籍、辞書、洗髪料、強壯剤など各種の丸薬・飲み薬などの販売。
- ③ 大、中、小各種類の鉛活字の販売。（卓249-250p）

おそらくこの3つの業務が「文裕堂」によって行われていたものと考えられる。

なお、この個所の図には「各種書籍及各様薬水出賣」の欄（同治十三年正月初九日）があり、そこにも『伊娑菩喻言』などが挙げられている。

『循環日報』はその印刷設備を英華書院から購入したが、その際にそれまで英華書院で発行していた書籍の版型も譲り受けたものと思われる（その中には『伊娑菩喻言』も含まれていたはずである）。それらを「文裕堂」の名で出版したというわけである。

- (7) この上海版の挿絵であるが、筆者が見た北京大学図書館蔵本では、最後の2話にしか描かれていないが、後述のように、宍戸の跋文では、「宗本間圖人物飛走」とある。従って、別の上海版系版本では他の部分にも挿絵があった可能性がある。北京大学図書館蔵本の場合、最後の2話だけは葉を改めており、また寓話のタイトルも横書きになっており、他の部分とは異なっていることもそのことを示唆している。
- (8) 前坊1989でも次のようにいう。

英訳を直接手にするよりはやく、『意拾喻言』系統の一本が幕末の日本に伝えられた、それは広東版ではなく、「上海施医院の活字刷版」であり、「喻言七十三条をおさめていた。

ただし、『意拾喻言』それ自体も明治の初めには伝えられていた可能性もある。英

華書院版『伊婁善喻言』に、次のような書き込みが見られるからである。

一本螻娘作螻支(20)

この部分は、上海版では「娘知」と作り、『意拾喻言』では「娘支」となっており、いずれも「螻支」ではないのであるが、「娘」は「螻」の誤りと考えれば、ここでいう「一本」とは『意拾喻言』と見ることできる。

(9) 沈1999, 6-15参照

00 拙稿1996参照

(11) 鈴木1927によれば、村山徳淳訓點による『訓譯伊婁善喻言』もあるというが、筆者は未見。

(12) 光緒三十三年葉德輝序本によった。

(13) たとえば、「齊人妻妾」であるが、中務1996でも述べているように、六朝時代のものと言われる『百喻經』に類似した話がある。

(14) 同じ教訓としての成語が原本には別の話(腐猫猪同居)にも使われるが、小野本では、そこでは削除している。